
Dark after moon

中納黒姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a r k a f t e r m o o n

【Nコード】

N 6 7 6 2 X

【作者名】

中納黒姫

【あらすじ】

愛人の死とともに、家に帰った父。父は愛人の子二人を引き取ることにした。それに反感を持つ千里は、二人を追いつくとするが

...

災厄の種（前書き）

アンダーザローズというヴィクトリア朝を舞台にした漫画の影響をもろに受けてます（汗）気になる方は買ってみてください。隠れた名作です

災厄の種

黒塗りの車が、かすかな音を立てて、止まる。千里^{せんり}は、その様子を3階の階段の窓辺からじつと眺めていた。

車から人影が降りてくるのを見届けると、後ろを振り返り、声をかけた。

「母さん、父さんだよ」

「そう…」

物憂げに答えたのは、30代後半と言ったところの美しい顔立ちの女性だ。黒のワンピースに、アイボリーのカーディガン、首には細い真珠の首飾り。化粧を施してもなお蒼白い顔からは何の表情も読み取れない。数年ぶりに自宅に帰ってきた父をどう思っているのか、千里は母の気持ちに思いをはせた。

「さあ、父さんを出迎えなきゃ」

つとめて明るい声を出して、母を急かした。正直なところ、父が帰ってくるとは想像もしていなかった。岩沢累子が死んで一か月余り、内輪だけの葬儀が行われたらしい。もちろん、母も千里も参列していない。むしろ、来られたら向こうもさぞかし困惑する事だろう。

正妻が夫の愛人の葬儀に参列するなんて。

父は4年ほど前から愛人のために別宅を設け、そちらで暮らすようになった。ところが、昨日になって、使用人づてで家に帰ると唐突に連絡をよこしたのだ。それ以外は何も言わなかったそうで、久しぶりに主を迎える家はあわただしくメイド達の手によって掃き清められた。

「奥様、千里様、旦那様がお見えになります」

古株の女中頭が声高に言う。

「大きな声を出さないで頂戴。頭痛がするといつも言っているのですよ」

こめかみを押さえながら、母が氷の声で言う。いつもはびくついて

母の言う事を聴く女中頭も、父が帰ってきたからには、これからは父の命を優先させると言わんばかりに一歩も引かない。

「出迎えに遅れてもわたくしは知りませんからね」

険のある言葉を投げかけ、年輩の女は大腿で去って行った。

「嫌な女。今まで寛大にしてやったのに、凶に乗って。辞めさせればよかったわ」

「父さんに言って辞めさせればいいさ」

「でもあの人は…」

言って、母は言い淀んだ。なんと言おうとしたのか、千里には分らなかった。

階段を下り、二人は玄関口へと降りたった。

「お帰りなさい、父さん」

母は、千里の後ろで身じろぎひとつせずにいる。

父は、記憶にある父とは別人のようだった。頬は病気で腫れたかのようにこけ、虚ろな目をしていた。千里はとっさに死んだ魚の目を連想した。

それほど岩沢累子の存在が大きかったということか。

だったら自分たちは何なのだと、父を責めるような気分になった。

母や自分が死んでも、父はこれほどまで悲しまないのではないかと言う想像が頭をかすめる。その想像はおそらく当たっているのだろうと、千里は内心思った。

「岩沢累子の息子ね」

母の言葉で初めて、千里は父の後ろに二人の少年が控えている事に気がついた。

一人は、まだ幼い幼稚園児くらいのふっくらとした少年。もう一人は、千里の通う高校の制服を着た気の強そうな少年だ。同い年くらいの少年は、千里と眼が合うと、一層きつくこちらを睨みつけてきた。

「ヒコと雅臣だ。母親が死んだんだ。父親の私が引き取るのが当然だろう。ヒコは4歳。千里と、雅臣は同い年だ」

腹違いの兄弟がいたとは初耳だった。同い年と言う事は、母と同時期に岩沢累子とも関係を持っていたということか。

「愛人の子となんか住みたくない。こいつらにこの家に住む権利はない」

「千里」

激情に駆られて口走った千里を遮ったのは、温度の低い母の声だった。

「わたしが、妻の千草です。岩沢累子には感謝しています。あなたたちの母親になるつもりはありません。しかし、あなた達には高倉家の息子として恥ずかしくないだけの教育と待遇を与えるつもりです」

前から考えてあったような流暢な口調で、感情をこめずに言う。母はこの兄弟の事を前から知っていたのだろう。

「僕は認めない。こんなの認めない」

千里はかすれた声で叫んだ。

幕間

「お前んちドロドロしてるなあ。お袋の好きな昼ドラマみたいじゃん」友人の遊佐は、千里の部屋で漫画雑誌を読みながら、呑気に言う。

人事だとすれば、大変だねで済む話だ。愛人が亡くなり、その遺児を父親が引き取った。ただそれだけの話。が、それが自分の身に降りかかってくるとなると、話は違ってくる。

千里の今の気持ちを一言でいえば、「最悪」だった。

最悪の気分のまま、千里はベッドに腰をかけて、ポテトチップスをばりばりと食べた。

「なあなあ、どんな奴？新しい弟君たちは？」

遊佐は好奇心を丸出しにして、千里の方に顔を突き出して尋ねてきた。

「上の雅臣って奴はひたすら感じ悪い。こっちが声掛けてやっても無視するし。下の弟の方は、まだ可愛げがあるな。まだ家に慣れてなくてびくびくしてる感じだけど」

何より同年というのが気に食わない。その上、同じ学校に転校させるという。千里の通っている学校は、地元では有名な進学校だ。

「あーあ、弟じゃなくて、妹だったらよかったのにな」ほら、千里って美形だから、その妹だったら美人だろうなあって」

「馬鹿か」

千里は、遊佐の頭を思いつきりはたいた。

「いつて」

遊佐は頭を抱え込む。

「手加減したぞ」

千里は平然と言う。

「してねえ。絶対してねえ」

そう言いあってるうちに、遊佐は何が面白いのかげらげら笑い出した。

千里もつられて笑う。あの兄弟が来て以来、笑ったのは今日が初めてかもしれない。

遊佐がいてくれてよかったと、千里は心の中で親友に感謝した。

末っ子

千里が自室で、i p o dで音楽を聴きつつ、勉強をしていると、トントンという小さなノックの音が聞こえた。

母親が自分の部屋に出向くことはまずない。父親は外出中だ。

雅臣というのも考えにくい。雅臣とは、あいつが来た夜に取っ組み合いの喧嘩をして以来、口をきいていない。荒っぽいことに慣れない千里は、ほとんど一方的にやられてしまった。

千里が数日前の出来事を思い出し、怒りを新たにしていると、再度控えめなノックが聞こえてきた。

「もしもし、千里お兄ちゃん？」

新しくできた幼い弟、ヒロの声だった。雅臣は憎々しいが、兄弟のいない千里にとってヒロは庇護すべき存在だった。食事時に顔を合わせるたび、声をかけていた。最初は恥ずかしがって、ほとんど口を開こうとしなかったが、千里にも慣れてきたのか、たどたどしい言葉で幼稚園での出来事を語ったりするようになった。気に食わないことに、ヒロは雅臣が大好きらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6762x/>

Dark after moon

2011年10月24日17時06分発行